

書評・『草戸千軒—木簡—』

水 藤 真

広島県福山市の草戸千軒町遺跡は、芦田川河口の中州にある中世の港町ないしは市場町と推定される集落跡で、昭和三六年からの発掘調査で、今日までに四千点に達する木簡を出土している。本書はその一九七八（昭和五三）年度の第二六次調査までに出土した木札等三八五一点の概要と、その内二六五一点の詳細な報告書である。

内容は、総説と釈文および写真から成り、総説では、第一章 遺跡の概要、第二章 墨書木札類とその出土遺構、第三章 中世木簡の形態と記載内容、第四章 その他の墨書木札類、第五章 墨書木札類出土の意義——の五章にわたって、草戸千軒出土の木簡およびその背景を説いている。ついで釈文では、その内重要（解説可能）

評
と思われる二六五一点について、一点一点の釈文を紹介すると同時に、その形態、大きさ、材質、内容の注記を実に細かく付し、それに対応させて別刷の写真が添えられている。実に丁寧な資料（墨書木札類）の紹介という他ない。

書
第一章、第二章では、表題の如く、この遺跡の概要や木簡の出土状況を述べるが、第二章では併せて中世木簡（墨書木札類）の分類

を行ない（報告書七頁参照）、中世木簡とその他木に墨書されたものとを厳格に区別し、次の第三章中世木簡の形態と記載内容で、さらに詳しく中世木簡の型式を分類している。これは既に奈良国立文化財研究所が、古代木簡について分類した方式を援用し、それに中世木簡の特質を加味したもので、今後の各地で出土するであろう中世木簡の分類・研究に一つの指標を与えたものである。

つまり中世木簡を大別して、板材のもの（型式番号一〇〇～一三八）と、角材のもの（型式番号一四〇～一六〇）の二型式に分類し、さらにそれぞれ穴を穿ったものと、切り込みのあるものの四種に分類している。

第四章その他の墨書木札類では、位牌・柿経・笹塔婆等の信仰資料や呪符などが紹介され、第五章の墨書木札類出土の意義では、中世史および中世社会の研究に果す木簡の意義と今後の見通しが述べられる。ただ、この中で、先の形態の分類とからめて、「形態と記載内容は密接な関係、つまり記載内容によって形態がきまると考えられるが、草戸千軒町遺跡出土木簡の場合不明な点も多く、今後の

検討をまたねばならない。」とされるのは残念なことである。それは、幸にして発掘された木簡ではあるが、その多くが断片または削屑であるという事情、或は破損が甚だしく、或は墨が消えて文字が不鮮明であるという事情によるからである。

このことは次の釈文および写真を見れば、誰しも領かれることであろう。四千点近い墨書木札類の内、保存良好と思われる二六五点についても尚、全く完璧に保存され、見事に解読されたものは、僅かに卒塔婆類を除き、ほとんど無いといって良いからである。しかし、判読が極めて困難ながらも、釈文編と写真とを対応させて見てゆくと、いくつかの事に気付くことができる。

その一は、多くのものが木目を縦に縦長の板、角材として使用している中で、木目を横にして、横長の板として使用したと考えられる例（資料番号二一～二七）があることである。この資料は、形式分類では一九七・一九九の断片および削屑に含まれるもので、その外形は全く不明であり、また内容も断片、削屑である性格上、不明であるが、およそ、縦に記された文字数よりも、横に記された行数の方が多いのではないかと推定されるものである。僅かに残された文字は数字が多く、またごく簡単な単語が記されているようで、この木片の場合は、黒板代りに、日々の用件を記していたものではないかと思われる。

つぎに木材の様体であるが、板材のものと、角材のものととの差が

外形としては顕著である。しかし内容的には両者の差は明瞭ではなく、むしろ材の上端に穴を穿ったもの（二〇二・一〇三・一四二・一四三型式）と、切り込みを入れたもの（二一〇・二一一・二二一型式）との差の方が顕著である。

穴を穿った型式のものに記された内容は、価格と思われる数字、物品名、数量を表わすと思われる数字、年月日と思しき数字が多く、まゝ人名および「かし」「あつけ」という動詞が、文章ではなく単語のまま記されている例が多い。これに対し、切り込みを入れた型式のものでは、やはり、価格とおぼしき数字、物品名、数量と思われる数字、年月日と考え得る数字を記すが、内には、文章を記したもの、明瞭に宛名と認められるもの、また単に動詞ではなく、修飾語や助詞を添えた動詞、つまり目的等が判明しそうな表現が認められる。

要するに、穴を穿った型式のものは、ただ単語を連ねただけで、書いた本人或は前後の事情を知りたく限られた人々にしか記載事項の意味内容が理解できないのに対し、切り込みをもつ型式のものは、当初から何らかの意思を相手方に伝える目的をもって書かれており、従って我々もその意味内容を若干知り得るものである。以下少し具体例を見てみよう。

七三A「くしか□□五くさい□□^{〔ちカ〕}

いまくらとの まいる

C「古□よりしやうせい」

150×25×4 112 板目材

これは判読不明の文字もあって、意味不明瞭な部分が残るものの物品名(?)を記し、「いまくらとのまいる」と宛名を記していることから、荷札と考えられる。

一六九A「ミ あかしのれうニあふら

一かうを二百十文ニかう

きのしやうのあふら」

C「う十一月十八日より

はし めてあかす」

235×25×6 111 スギ 板目材

これは全く稀な例で、ようやく意味の捉え得る例である。

一七〇「ミ□よ と九めに 百八十文□

さかへのをと二郎 らい十月

□□(異)百文□□(筆)ミ 六月廿三日」

239×60×11 111 板目材

一七一A「かね□□□□□□四百□四文

あこミ 八月 廿三

もと百とりふん□□文とりて」

…(下略)…

239×37×9 111 板目材

一七〇・一七一も共に意味不明瞭ながら、両者を比較しながら見てゆくと、「物品名・数量・価格・人名・期限・利息・月日」が記されているように思われる。仮に付け(掛売・掛買)の精算等商行為

にかかわるものであるとすれば、「誰が、いつ、何を、いくらで」ということは是非とも把握される必要がある、それらの事項が一定の順序で記されていたと考えられる。先に外形の相異がその記載内容と対応していただろうと考えたのと同じく、その記載様式つまり書式も、その内容と対応していたであろう。木簡の分類には、この書式も考慮に入れる必要がある。

ともあれ、多少とも意味を考え得る切り込みのある札と、現段階ではほとんど意味を捉え得ない穴を穿った札とは、当初から記載の内容、目的が異なっていたと考えられる。

次には表面を削って再使用し得るという木材の特性について考えてみたい。型式分類の一〇二型式のものを削って再使用したものが一〇三型式、同じく一四二・一〇〇型式の再使用が一四三・一〇一型式であることは疑いなく、その折り削屑である一九九型式が全出土量の九二・三七%を占めることは右のことを裏付けている。ところで、本報告書では、一〇一、一〇三、一四三型式以外には、特に表面を削ってあるか否かが報告されていない点が気にかかる。つまり、今触れた切り込みのある木札は削って再使用という行為があったのか、なかったのか?また右の三例も表面が削られていたことは確かであるが、裏面や側面は削られたことがあったのか、なかったのか?という点である。

仮に板状木簡の場合、表面のみが削られ再使用され、裏面にそれ

がないとすれば、これは如何なる理由によるのか。現実の木簡の作成、利用の仕方を考える上で興味ある点ではなからうか。また、切り込みのある札に表面を削った痕跡がないとすれば、切り込みのある札は一回限りの使用に供され、穴を穿った木札は何度もの使用に供されたという両者の使用法の差を導き出すことが可能であろう。

さて、こうした草戸千軒出土の木簡の特徴について、本書は、「古代の遺跡から出土する木簡は文書様木簡にしる付札にしる極めて公的な性格を帯びているが、草戸千軒遺跡出土の木簡は私的な性格が強い」と述べられている。このことについては、ほぼ同感で、草戸出土の木簡の読みにくい理由の一つともなっている。しかし、それは草戸出土の木簡の特徴であり、中世木簡の特徴の一つに止まるだろう。

同じく中世の遺跡である福井県の一乗谷朝倉氏遺跡からは、将棋の駒を含めて百数十点の墨書木札類が出土している。そこでは、例えば「くらほね六口之内 永禄三年五月廿三日 中村甚介取次」と意味明瞭な木簡（荷札）が出土している他、付札・名札・遊戯札・柿経と、いずれも記載内容は比較的良く理解される。中でも荷札は年貢上納の一端を示すもので公的な性格をもっている。こうした中世木簡の公的・私的な使用例の差は、この場合、一乗谷は戦国大名朝倉氏の居城、草戸は港町もしくは市場町の集落跡という両者の性格の相異によるものであろう。

ここまで少しく検討してきた今、われわれは、今後以下のことを期待したい。

一つは、既に古代の木簡について、東野治之氏が「奈良平安時代の文献に現われた木簡」(『正倉院文書と木簡の研究』)で行なった如く、中世木簡の用例を探ること。

一つは、その書式を類型化して記載項目、機能を探ること。——先に資料番号一七〇と一七一が形態、記載内容が酷似し、同種目的に使用されたと考えたが、他に一八八と一八九、一九一と一九二は、それぞれ同種の木簡である。

一つは、当時の商行為、商習慣を明らかにすること。——先に草戸出土の穴を穿った木簡はメモであると考えたが、それは物品の正札（定価札）であったかも、或は売買時の売掛・買掛伝票であったかも知れない。いずれにせよ、これを使用した人々にとっては、余りにも自明の事柄であって、ただ物品名、数量、価格等を記しておけば、十分に役立ったのである。従ってどういう状況の中で記したものであるかが判れば、自然とその意味するところも理解されよう。一つは、完形で、意味の判明するものを発掘すること。——これら単純な記載内容のものは、いくつかの書式に類型化され、それぞれ全く同じ書式・記載内容であろう。ただ一点、意味のあるものが判明すれば、今解説に悩む多くのものは、ほぼ自動的に意味明瞭になってくるであろう。

これらの作業の進展と共に、本報告書から知り得る内容は徐々に豊かなものとなるう。

以上、くどくどしく述べてきたことは、本報告書を労をいとわず出版された人々には、自明のことであった。それは、

ただ、残念なことに、墨痕が薄く読みにくいこと、仮名で走書きしているため判読できないなどその解読には多くの困難がともなっている。しかし、その重要さは計り知れないものがあるため、出土木簡を写真によって早急に公開する必要がある、積読について不完全であることを承知の上、敢えて図録の刊行に踏みきった。

と自認される行間から窺い知ることができる。全くその見識、熱意、努力には、ただ敬服するのみである。

本書は、既に中世史研究上の様々な興味ある事柄を紹介しているが、同時に中世社会をその表層ではなく、より具体的な、現実の生活に即して解明すべきことを、中世人の残した断片断片を提示して訴えているのである。

調査の一層の進展、二集・三集の刊行、それから判明するであろう草戸千軒町遺跡の全貌と生活の実像を期待しつつ、本書の出版を喜ぶたい。

広島県草戸千軒町遺跡調査研究所『草戸千軒—木簡—』（草戸千軒町遺跡研究資料 一）一九八二年三月三〇日発行 解説五八頁 図版六〇

木簡学会役員

会長	岸 俊男
副会長	大庭 脩
委員	青木 和夫
	門脇 禎二
	佐藤 宗諄
	坪井 清足
	原 秀三郎
監事	関 晃
幹事	加藤 優
	寺崎 保広
	町田 章
	土田 直鎮
	栄原永遠男
	東野 治之
	和田 萃
	佐藤 信
	橋本 義則
	岡崎 敬
	鬼頭 清明
	田中 稔
	早川 庄八
	直木孝次郎
	狩野 久
	岩本 次郎
	平野 邦雄